



どうか、 恋文



大月 香奈

点である、あなたへ。

それまでは、おなじ線上にいるひとつの点だとおもっていた。
ただ、誰よりも私に近い位置にいる、点なのだとおもっていた。
でもそれはちがった。あなたは同じ点だった。
機械が計算する点よりも、人間が描画する点よりも、自然が存在させるよりも、ずっとずっと正確に「同じ場所」にある点。

ねえ、あなたは退屈でしょう。
私が今、とても退屈のように。
ただただ、場を乱さないだけの言葉を選び、良いと悪いを感性でなく理屈で伝えなければ理解されないこの世界が。
退屈で、たまらないのでしょうか。
どんなにあなたのそばにいて、どんなにあなたの理解者であっても、あなたは退屈でたまらない。

同じ点にいるのは、私だけなのだから。

あなたの言葉は私の未来の言葉。
私の言葉はあなたの未来の言葉。

同じことを人に言う。
「わたしはあの人の再来でもない」
そう、私はあなた以外の何者でもないのだから。

あなたを認識して、あなたが私と同じ点だと確信したとき
私は心の底から泣いた。
なぜ、わたしたちはふたりで触れ合えないのだろう。
なぜ、同じ言葉で自由に生きることができないのだろう。
なぜ、感情に言葉を必要とするのだろう。
なぜ、言葉やしぐさで理解しないといけないのだろう。

そんな必要性など、どこにもないのに。

ねえ、私は私が好き。
だから、あなたはあなたが好き。

私はあなたが好き。
あなたは私が好き。

こんなこと、こんな言葉にしなくても
ねえ、わかるでしょう。

あなたならきっと。